

「名人伝」を通じて、著者が言いたかったであろうこと。：私（安藤）の解釈。

0) まず「志（こころざし）」を立てることの大切さ。これがないと人はどこにも行けない。

1) 人間界に留まる人＝飛衛は、「射の射」を極めている。

2) 人間界と異界の境界に住む人＝甘蠅（かんよう）は、「不射の射」を極めている。

3) 異界に行ってしまった人＝紀昌は、まず「射の射」の修行から始めて、ついには「至為は為す無く、至言は言を去り、至射は射ることなし」即ち、「不為の為」と「不言の言」と「不射の射」の3つの奥義すべてを極めた。だから、最後は弓のことさえ忘れてしまった。

4) 人は永年の修行によって、志を立てた時点では想像できないような「はるかに遠いところ」まで行くことができる。（学問の修業もこれと同じであろう）

ここで、1) の境地は凡人でも理解でき、2) の境地は想像力を働かせれば、なんとか理解ができるが、3) の境地は本人以外の誰にも理解できない境地と思われる。

但し、邯鄲の職人たちは「画家は絵筆を隠し、楽人は瑟の絃を断ち、工匠は規矩を手にするのを恥じた」わけだから、凡人には理解することはできなくても、「人間というものは、永年の修行によって、究極的にはそのような境地にたどり着くことができる」ということを素直に理解したのであろう。